

リレートーク

紹介者



川鍋 一朗氏
日本交通
取締役社長



渋澤 健氏
シブサワ・アンド・カンパニー
代表取締役

#162

Dスクールをつくる

先日、早めに帰宅したら家庭教師のM君がスーツ姿で小学生の長男を指導していた。就職活動の真っ最中に違いない。夕食に残ってもらったM君に、最近聞いた話を確認してみた。「会社説明会の応募の発表があると、あっという間に定員オーバーになるので、スマートフォンやタブレット端末が就職活動の必須ツールになっていることは本当か」と。

パスタをほお張るM君はうなずく。「そうなんです。自宅に帰って、PCをチェックしたら、既に定員締切という場合があるんですが、僕はタブレットなんて持ってない」と嘆いた。

国立の進学校から国立大学を経たM君は、大学院工学系研究科の一年生だ。わが国の教育ピラミッドの頂点に立つ優秀な若者の就職活動の現実を聞くと、社会形成の何かがおかしいと感じる。一方、あれほど遊ぶ意欲に尽きなかったわが子は、当たり前のように塾に通い始め機と向き合っている。違う道があるのではないのかと親心が迷う。

アメリカでは最近、Dスクールという教育の潮流が表れている。Bスクールとは社会にMBAを輩出するビジネススクールの略語であるが、Dスクールの「D」はデザインのことを示す。

「デザイン学校」と聞くと、日本ではアニメーション、アート、ファッション、インテリアや建築というイメージが浮かび上がる。ここでいう、Dスクールとは、工学、医療、経営、教養など多様な学問領域にわたり、広義的なデザインによって問題解決型のイノベーションを促す21世紀型教育モデルである。

多様性が増す今世紀では、決まった枠組みや視点で、決まった答えを出す人材のニーズは少ない。一方、複雑で不確定な要素を敬遠することなく、革新的な思考を発揮できる人材のニーズが高まるのだ。

このDスクールの思想と方法の本場の米国から取り込む動きが実は日本にもある。小林りんさんというエネルギッシュな若手女性が先陣に立ち、日本初の全寮制中学高校課程インターナショナルスクールを設立し、日本発のグローバル人材を創出することに挑戦している。教育について「言う」だけでなく、ゼロからつくり上げている、この意欲。なるほど、「D」はDoの略でもあるのだ。

次回は **火浦 俊彦氏** (ペイン・アンド・カンパニー・ジャパン・インコーポレイテッド マネージング パートナー) にご登場いただきます。